



かの
秋山 華乃さん

●植野小学校 6年

助けることを教えたい

私の将来の夢は二つあります。一つ目は、看護師になることです。二つ目は、看護専門学校の先生になることです。

私はテレビや新聞を見て、病気で苦しんでいる人がたくさんいると知り、助けたいと思いました。それと同時に助けることの素晴らしさを教えたい、とも思いました。

そのためにはたくさん勉強することが大切だと思うので、これからも夢を叶えられるようにがんばりたいと思います。



市長からの

メッセージ



寒さが一段と身にしみる季節となり、早いもので一年を振り返る時期になりました。

先月3日から8日まで、私は市内の各団体の皆さんと「さのまる」と共に、姉妹都市であるアメリカ合衆国ペンシルベニア州ランカスター市を訪問いたしました。今回の訪問は姉妹都市締結20周年を記念したもので、訪問ではグレイ市長をはじめ、ランカスター市の皆さんの心温まる歓迎を受け、私からは今後の末長い友好交流の継続と更に広い交流を推進していきたいと申し上げてまいりました。

「さのまる」もランカスター市街や小学校でパフォーマンスを行い、多くの市民や小学生の皆さんに歓迎していただきました。またニューヨークでの栃木県人会との懇談会や、路上でのパフォーマンスも大変人気でございました。

「さのまる」の海外でのパフォーマンスは、8月の香港、9月の英国、そして今回の訪米と今年3度目となります。今や活躍の場は国内にとどまらず海外にまで広がっております。現在、本市では「さのまる」を牽引役とする「佐野市シティプロモーション推進基本計画」の策定を進めておりますが、今後はこれまで以上に、市の魅力を市内外のみならず国外に発信してまいります。

また先月には、佐野市運動公園とその周辺で栃木県高等学校駅伝競走大会、関東高等学校駅伝競走大会が開催されました。12月には第10回の記念となるさのまるマラソン大会が開催されます。「スポーツ立市」を掲げる本市といたしましては、スポーツの持つ力による活力ある街づくりに今後も取り組んでまいります。

これから忙しい年末を迎えますが、皆様には十分お体に気をつけてお過ごしください。

岡部 正英

今回の表紙 「市制10周年記念 第10回佐野市民駅伝」11月9日(日)



ウッドランド森沢から葛の里壱番館前の19.03キロの9区間を、市内体育協会の13支部が走りました。小雨が降る寒い中での開催となりましたが、各支部の代表選手たちが懸命な走りでタスキをつなぎました。

優勝したのは犬伏支部。二つの区間賞を獲得するなど、見事なタスキリレーでした。

ともあき
田崎 智亮さん
(高萩町)



キラリ★
話題の「ひと」

○プロフィール
下野新聞の記者として、佐野市に移り住んで5年。地域に寄り添った記事を心がけ、住民の生活や命を守るために役立つ報道を志す。ソフトテニスでインターハイ出場の経験を持つ、28歳の若手記者。

僕のペンで佐野市に活力を

佐野市のことなら何でも知っている、若き新聞記者・田崎智亮さんにお話を伺いました。
田崎さんは、下野新聞社地域報道部・佐野支局に勤務し、日夜、佐野市に起こった出来事取材し、高萩町の支局より、宇都宮市の新聞社へ記事を送っています。

那須塩原市出身の田崎さんは、入社後2年間、社会部県警担当の記者を経て、平成22年に佐野市にやってきました。「この街は何となく僕の故郷に似ている」と感じたのが佐野市の第一印象でした。佐野市での記者生活について「昨年より大きな話題がたくさんあり、地域の記者として楽しい」と話します。
皆さんもご承知の話題について聞いてみました。
先ず田中正造について。「命を懸けて鉱毒問題と闘った田中正造翁の姿



取材する田崎さん

をたくさん伝えてきました。特集『今、生きる正造』は現在も続いています」とのこと。田崎さんは大学の頃、ゼミの勉強会で佐野市を訪れ、正造大学の坂原さんにも会っていたそうです。

続いて「さのまる」について。「ゆるキャラグランプリ®2013でのさのまるの日本一の瞬間、羽生市の会場で、佐野市の職員や市民の皆さんと一緒に喜びで震えました。それまでの大勢の方々の苦労や努力を取材していたので、日本一はとても感動しました」。

最後に天命鑄物について。「日本一の歴史のある天命鑄物についても、これまでたくさん書きました。鑄造所に何度も足を運び勉強しました。この佐野市の宝物・天命鑄物をこれからも全県に向けて発信していきたい」と話していました。

「佐野の方々には、みんな優しく、食べ物も美味しいのでこんなに太っちゃいました」と豪快に笑う田崎さん。紙面に掲載される田崎さんの記事を、毎朝楽しみに待っている佐野市の皆さんと那須塩原市のご両親に今後たくさん佐野市の話題が届けられることでしょう。

(市民記者 吉井貴子)

佐野弁
ばんざい

あれやこれや食べて、最後に食べるものをクチッパライという

近所の人たちと田植えする協同作業は、昭和の中頃まで行われていました。田植えが終わると、協力し合った近所の人たちやその家族が、事前に決められている家におおぜい寄り集まって、飲食しながら田植えの終了を祝いました。その時の食事は、ご飯や麺類以外に、芋類・豆類の煮つけや野菜などが主でした。そばやうどんばかり食べて、満腹感を味わう人がほとんどでした。主婦たちは、力の源であるご飯を食べるよう男たちにすすめました。このように終わりにする食べ物をクチッパライといいます。

「そばなんかいくら食ったって、すぐに腹が減っちゃって、力が出ナカンベサー。ンだからクチッパライに、ご飯でも食わッセ(くてください)な」

家庭では、毎日ご飯を食べるのが普通ですが、来客のある祝日や休日には、まず、そばやうどんを打ってもてなすのが半ば慣例となっていました。クチッパライは「口払い」で、口にあるものをきれいに取り除き、あらためて最後に食べる食べ物のこと、これが本来の意味です。

共通語の「口直しくちなお」も、食事が終わってから別のものを食べるという点では、クチッパライと似ています。でも、「口直しにアイスクリームを食べた」のように、口直しは、まずいものや苦いものを口にした後で、その嫌な味を消すために、別のものを食べたたり飲んだりすることをいいます。したがって、内容的にクチッパライとは異なります。

(市民記者 森下喜一)

